

# 高等学校「家庭基礎」における ホームプロジェクト指導法に関する研究 ーグループ学習を用いたテーマ設定の効果ー

Research on The Home Project Guidance Method in High School  
in “Basic Home Science”  
ーThe Effects of Theme Setting in Group Studiesー

加 藤 敦 子<sup>\*1</sup>

Atuko KATO

<sup>\*1</sup> 福岡教育大学教育学部研究科

甲 斐 純 子<sup>\*2</sup>

Sumiko KAI

<sup>\*2</sup> 福岡教育大学

(平成22年9月30日受理)

## 抄録

ホームプロジェクトは、家庭科の学習と家庭生活を結びつけ、生徒自らが抱いた問題について、教師の指導と家族の協力のもとに家庭生活の改善・向上を図る学習である。学習指導要領にも位置づけられているホームプロジェクトであるが、現在、指導の困難さや生徒の家庭問題に対する関心の低さ、さらに家庭科の単位数不足などから、多くの高校でホームプロジェクトを実施していない現状が明らかとされている。

そこで本研究では、「家庭基礎」における理想的なホームプロジェクト指導法を考案し、その検証を試みることを目的とする。考案した指導法は、1 テーマ設定、2 発表会、3 繰り返し学習、の3段階で従来の指導法と異なる場面を設定した。なお、より効果的な指導法を探るため、1 テーマ設定場面において、グループ学習を導入した実験群と導入していない対照群を設定した。検証授業は、福岡県立M高校2年生8クラスで行った。各段階ごとに質問紙調査を行い、全体を通してグループ学習の効果を見るため、調査結果分析時に両群の比較を行った。検証授業の結果、生徒のホームプロジェクトに対する意欲、役立ち感、満足度は飛躍的に向上し、テーマ設定場面におけるグループ学習導入の効果が実証された。

本研究より、「家庭基礎」2単位においても、効果的なホームプロジェクトの指導を行うことが可能であることが分かった。ホームプロジェクトを実践することは、家庭科を日々の生活に活かす思考を形成することにつながる。本研究における指導法の提案は、全ての高校でホームプロジェクトを実施できる土台作りのため、布石をうてたものとする。

Key Words：ホームプロジェクト、グループ学習、家庭基礎、検証授業

## 1. 研究目的

### 1-1. ホームプロジェクトの概念と意義

ホームプロジェクトは、アメリカの教育哲学者キルパトリックによって提唱されたプロジェクトメソッドをベースに、See（問題発見）→Plan

（計画）→ Do（実施）→ See（反省・評価）の4つの過程を踏むものである<sup>1)</sup>。すなわち、生徒自身が生活の中から問題をみつけ、自発的に計画・実施し、結果について反省・評価するというプロセスで学習が進められる。この問題解決学習は、デューイの経験主義教育理論を具現化した方法で

ある<sup>2)</sup>。近年、PISA調査で日本の高校生の問題解決能力が低下している実態が明らかになった。問題解決能力は、生きる力の根幹であり、問題解決学習であるホームプロジェクトは、家庭科教育の真髄として、家庭科の意義を示せる大事な学習である。そのため、高等学校学習指導要領にも明確に位置付けられており、家庭科における実践的・体験的学習の中心となっている学習方法である。

平成20年度に告示された高等学校新学習指導要領では、家庭での問題解決学習であるホームプロジェクトを、今まで以上に充実させるよう求められている。

### 1-2. ホームプロジェクトの問題点と本研究の目的

戦後、高等学校家庭科ではホームプロジェクトが継続して行われてきた。ホームプロジェクトを実施した高等学校では、『家族の一員としての自覚が身に付く』『家庭生活における問題意識が高まる』など、その効果を裏付ける意見が多く聞かれる。しかし一方で、実施していない学校も数多くあることが報告されている<sup>3)</sup>。2006年9月に愛知県高等学校家庭科研究部会が112校の教師を対象に行った調査結果によると、ホームプロジェクトを実施している高校は、34校(30.4%)であった<sup>4)</sup>。また、新潟県高等学校家庭科教師を対象とした鈴木・笠原の調査(2000)では、ホームプロジェクトを実施している高校は、50校中14校であり、3割にも満たなかった<sup>5)</sup>。しかし、必ずしもホームプロジェクトは生徒達から歓迎され、有効な教育効果を上げているとは言えないと指摘されている<sup>6)</sup>。また、ホームプロジェクトは学んだ生徒からは積極的に受けとめられうる学習であるが、取り組みによっては生徒達から疎んじられる可能性もあるという<sup>7)</sup>。このような現状の中、教育課程改訂後も、多くの高等学校で「家庭基礎」2単位が選択され、ホームプロジェクトを実施しない学校も多くなることが予想される。家庭科学習指導要領に位置づけられているにも関わらず、ホームプロジェクトが実施されない背景にある問題点をまとめると、指導者のホームプロジェクトに対する認識の浅さと指導法に対する未熟さ、生徒の家庭問題に対する関心の低さ、「家庭基礎」の単位数不足などが考えられる。これらの問題点を解決すべく、本研究では「家庭基礎」における理想的なホームプロジェクト指導法を考案し、その検証を試みることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2-1. 実態調査

#### (1) 従来のホームプロジェクト指導法における生徒の実態調査

- 1) 内容 ホームプロジェクトに対する意欲等
- 2) 対象 福岡県立M高校2年生
- 3) 時期 2008年9月
- 4) 方法 質問紙調査

#### (2) 検証授業対象生徒の実態調査

- 1) 内容 ①家事時間  
②家庭生活における問題意識  
③ホームプロジェクトの実施状況  
(大学生のみ)

2) 対象	福岡県立M高校2年生	310名
	福岡市立I中学校2年生	63名
	福岡教育大学2年生	97名

※検証授業対象生徒の実態把握のため、中学生と大学生の実態調査も行った。

- 3) 時期 2009年7月～8月
- 4) 方法 質問紙調査

### 2-2. 検証授業

- (1) 対象 福岡県立M高校2年生 8クラス
- (2) 時期 2009年7月・9月・1月
- (3) 方法

従来のホームプロジェクトの指導法は、「ホームプロジェクトの意義と進め方について説明をし、生徒に各自実践させる」が一般的である。しかし、家庭生活の問題点を見つける段階でつまり生徒も多く、実践への意欲を失いがちであった。そこで、生徒が難しいと捉えがちなホームプロジェクトのテーマ設定を授業時間内で行わせることで、家庭での実践に入りやすくなるという仮説を立てた。その際、効果的なテーマ設定の指導法を探るため、グループ学習を導入した実験群と、それを導入していない対照群を設定し、検証授業を行った(展開①)。

また、従来の指導法では、ホームプロジェクトを実践後、教師が回収して評価するのみで終わることが一般的であるが、発表会を行うことで、他者のホームプロジェクトを通して自分のホームプロジェクトに対する反省・評価を深めることができるという仮説を立てた(展開②)。

さらに、従来ホームプロジェクトは1回のみの実践で終わることが一般的であるが、繰り返し学習させることで、その後も生活改善に対する意欲を継続させることができるという仮説を立てた

(展開③)。

検証授業は、上記の通り展開①②③の3段階で行い、段階ごとに質問紙調査を行った。その際、全体を通して展開①のグループ学習の効果を見るため、調査結果分析時に両群の比較を行った。

図1, 2に、検証授業の全体像を示す。(下線部分は、従来の授業構成)

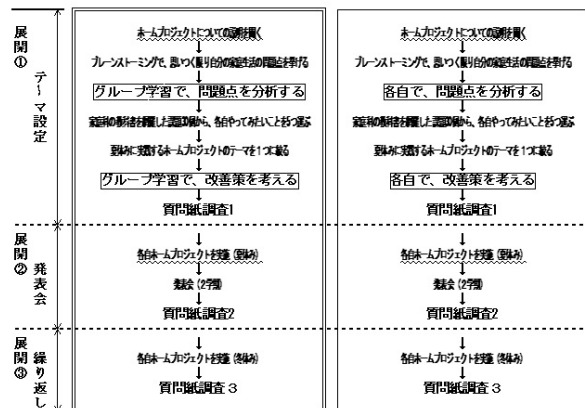


図1 グループ学習を導入した実験群

図2 グループ学習を導入しない対照群

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 実態調査結果

##### (1) 従来のホームプロジェクト指導法における生徒の実態調査の結果

従来の指導法を行った昨年度のホームプロジェクト実施後調査によると、ホームプロジェクトを意欲的に行えた生徒は、半数以下であった。また、継続してホームプロジェクトを行えている生徒は、約3割であった。しかし、ホームプロジェクトに対する役立ち感は、約7割の生徒が感じており、意欲は持てなくても、家庭科の内容を家庭生活に活かすことの必要性は認識したようであった。また、ホームプロジェクトに対する満足度は、家族が協力的であるほど高くなる傾向にあることが分かった。

表1 ホームプロジェクトに対する意欲 (285人)				
とても意欲的	意欲的	どちらでもない	意欲を持てなかった	全く意欲を持てなかった
14人 (4.9%)	126人 (44.2%)	118人 (41.4%)	17人 (6.0%)	10人 (3.5%)

表2 ホームプロジェクトを継続しているか (289人)	
継続している	継続していない
87人 (30.1%)	202人 (69.9%)

表3 ホームプロジェクトに対する役立ち感 (286人)			
とても役立った	少し役立った	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
16人(5.6%)	175人(61.2%)	79人(27.6%)	16人(5.6%)

表4 ホームプロジェクトに対する家族の関わりと満足度 (292人)					
家族が協力的 (100人)	とても満足	満足	普通	満足でない	全く満足ない
6人(6.0%)	34人(34.0%)	55人(55.0%)	2人(2.0%)	3人(3.0%)	
家族が知っている (63人)	2人(3.2%)	12人(19.0%)	46人(73.0%)	3人(4.8%)	0人(0.0%)
家族が無関心 (129人)	0人(0.0%)	12人(9.3%)	102人(79.1%)	8人(6.2%)	7人(5.4%)

##### (2) 検証授業対象生徒の実態調査結果

###### 1) 家事時間

検証授業対象高校生の家事時間は平均12.5分で、中学生 (23.2分)、大学生 (46.0分) と比較して、非常に短いことが分かった。また、中高生の男子は女子の2/3程度しか家事をしておらず、家庭内で性別役割分業意識がある実態が明らかになった。

###### 2) 家庭生活における問題意識

全国高等学校家庭クラブ連盟が発行しているFHJ GUIDE&WORK BOOK 5頁の表を参考に加藤が作成した表5をもとに、家庭生活における問題意識を調査した。

表 5 家庭生活で改善したい項目				
		中学2年生	高校2年生	大学2年生
家庭	1 家族の一員として責任ある家庭生活を送りたい	1人 (1.6%)	10 (3.4%)	2人 (2.2%)
	2 有効な時間の使い方をしたい	14 (22.6%)	88 (29.2%)	30 (33.3%)
	3 家族とのコミュニケーションを伸ばしたい	0 (0.0%)	1 (0.3%)	3 (3.3%)
	4 福祉や介護に関心があり、活動したい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.1%)
	5 生活習慣を確立に取り入れ、暮らしを豊かにしたい	1 (1.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
食	6 一日3食、栄養バランスを考えたい	2 (3.2%)	13 (4.5%)	21 (23.3%)
	7 家庭や地域に居る生活の文化を大切にしたい	1 (1.6%)	16 (5.5%)	0 (0.0%)
	8 食品の衛生や安全性に気をつけたい	1 (1.6%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)
	9 健康を考えた家族の食事づくりをしたい	4 (6.5%)	12 (4.1%)	1 (1.1%)
	10 健康を考えた生活を送りたい (ヨガやヨガ、エクササイズなど)	1 (1.6%)	3 (1.0%)	0 (0.0%)
衣	11 家族の暮らしを計画的に行いたい	2 (3.2%)	5 (1.7%)	1 (1.1%)
	12 家族によって自分の個性を表現したい	3 (4.8%)	2 (0.7%)	1 (1.1%)
	13 自分で家族管理 (洗濯、アイロン、収納など) をしたい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	7 (2.4%)
	14 家族の暮らし、家族の暮らしには、必要に応じて見たい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	15 ボタンが壊れたり、すそのほつれなどは、自分で直したい	2 (3.2%)	7 (2.4%)	1 (1.1%)
住	16 部屋の片付け整理整頓し、快適にしたい	3 (4.8%)	7 (2.4%)	6 (6.7%)
	17 住まいの中心となる空間づくりをしたい	0 (0.0%)	1 (0.3%)	1 (1.1%)
	18 住まいの安全対策 (防犯、防犯、防犯など) をしたい	0 (0.0%)	7 (2.4%)	0 (0.0%)
	19 地域の町づくりの取り組みや生活ルール (ゴミ出し等) を知りたい	0 (0.0%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
	20 誰かが暮らしやすい住まいや地域との関わりについて考えたい	0 (0.0%)	5 (1.7%)	1 (1.1%)
学	21 青年期にふさわしい生活習慣を身につけたい	1 (1.6%)	4 (1.4%)	1 (1.1%)
	22 子ども達の成長を知りたい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.1%)
	23 家族の子どもを取り巻く環境について考えたい	0 (0.0%)	1 (0.3%)	1 (1.1%)
	24 既婚文化財 (おもちゃ、絵本など) をつくりたい	2 (3.2%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
	25 小さな子どもの相手をしたい	4 (6.5%)	2 (0.7%)	4 (4.4%)
そ	26 消費生活に巻き込まれないようにしたい	3 (4.8%)	1 (0.3%)	0 (0.0%)
	27 健康、健康に配慮した消費行動をしたい	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	28 計画的な金銭の運用 (お金の使い方など) をしたい	4 (6.5%)	13 (4.5%)	13 (14.4%)
	29 一人で暮らす自信をつけたい	4 (6.5%)	13 (4.5%)	2 (2.2%)
	30 自分の生活設計 (ライフプラン) を考えたい	4 (6.5%)	2 (0.7%)	0 (0.0%)
合計		62人	291人	90人

※本表は、家庭生活で改善したい項目で1位に選んだもののうち、10%を超えるもの

中・高・大、いずれも、『有効な時間の使い方をしたい』を選択した生徒が最も多いが、この原因には違いがあり、高校生は、多忙さゆえの時間の使い方、大学生は、ゆとりある自由時間の使い方に関心を持ち、高校生は、散らかった部屋に問題意識を持っており、中学生は自立に関する漠然とした問題意識、大学生は食生活や金銭管理など、生活に即した問題意識を持っていると分析できる。

###### 3) ホームプロジェクトの実施状況

福岡教育大学2年生に高校生の頃、家庭科でホームプロジェクトを実施したことがあるかどうかを尋ねたところ、実施していた者は8.2%であった。覚えていないや未回答も6割程度いることから、実際は、もっと多くの者が実施していたと推察される。この結果より、生徒たちの家庭科におけるホームプロジェクトの印象は、薄いことが分かった。しかし、実際にホームプロジェクトを実施したことがある大学生の感想は、達成感や充実感、家族とのコミュニケーションが増えた、暮らしの



役に立つことが学べた、一人暮らしをしてホームプロジェクトの重要性を再認識したなど、肯定的なものばかりであった。すなわち、効果的なホームプロジェクトの学習ができた生徒は印象深く記憶に残っているが、そうでなかった生徒は記憶にも残っていないという、二極化が起きていると考えられる。

表6 出身高校家庭科におけるホームプロジェクトの実施状況

実施していた	実施していない	覚えていない	未回答
8名(8.2%)	32名(33.0%)	31名(32.0%)	26名(26.8%)

### 3-2. 検証授業の結果

#### (1) 展開①テーマ設定授業の結果

##### 1) 家庭生活における問題点の数

家庭生活における問題点を思いつく限り挙げさせたところ、グループ学習非導入群では平均4.6個しか思い浮かばなかったが、KJ法を用いたグループ学習導入群は平均18.6個の問題点が挙げられた。

表7 家庭生活における問題点の数(グループ学習非導入群)

A組(37人)	B組(35人)	C組(40人)	D組(42人)	最少	最多	平均
4.4個	3.5個	5.7個	データなし	1個	14個	4.6個

表8 家庭生活における問題点の数(グループ学習導入群)

E組(35人)	F組(37人)	G組(42人)	H組(42人)	最少	最多	平均
17.7個	17.6個	23.3個	16.2個	7個	33個	18.6個



図3 テーマ設定授業風景(グループ学習非導入群)



図4 テーマ設定授業風景(グループ学習導入群)

##### 2) 質問紙調査1の結果

ホームプロジェクトのテーマを授業時間内に決定できた生徒は、グループ学習導入群の方が約5%多かった。また、選択したテーマの分野は、両群とも①住生活、②食生活、③家庭経営の順で、ほぼ同じだった。その実践対象は、両群ともに自分自身が8割以上を占め、ホームプロジェクト実践前段階において、問題意識が家族にまで及ぶ生

徒は少なかった。また、夏休みに実施するホームプロジェクトに対する意欲は、両群ともほぼ同じであった。

表9 授業時間内にホームプロジェクトのテーマが決定した生徒

グループ学習導入群(156人)	グループ学習非導入群(153人)
153人(85.3%)	125人(80.4%)

表10 選択したテーマの分野

	家庭経営	食生活	住生活	保育	その他	重複
グループ学習導入群(131人)	17人(13.0%)	26人(19.8%)	7人(5.3%)	64人(48.9%)	1人(0.8%)	16人(12.2%)
グループ学習非導入群(123人)	17人(13.6%)	26人(20.8%)	9人(7.2%)	52人(41.6%)	3人(2.4%)	12人(9.6%)

表11 ホームプロジェクトの対象

	自分自身	自分+家族
グループ学習導入群(131人)	113人(86.3%)	18人(13.7%)
グループ学習非導入群(122人)	101人(82.8%)	21人(17.2%)

表12 ホームプロジェクトに対する意欲(HP実施前)

	とても意欲的	意欲的	どちらでもない	意欲を持っていない	全く意欲持てない
グループ学習導入群(153人)	29人(20%)	79人(51.6%)	37人(24.2%)	4人(2.6%)	4人(2.6%)
グループ学習非導入群(153人)	29人(20%)	79人(51.6%)	38人(24.2%)	2人(1.3%)	5人(3.3%)

授業時間内にテーマに対する改善策が決定した生徒は、グループ学習導入群の方が約20%多かった。また、改善策決定者のホームプロジェクトに対する意欲は、未定者に比べて高かった。すなわち、テーマ設定におけるグループ学習導入は、生徒のホームプロジェクトに対する意欲を高めるために、効果的な手段であることが分かった。

表13 授業時間内にテーマに対する改善策が決定した生徒

グループ学習導入群(132人)	グループ学習非導入群(125人)
74人(56.1%)	45人(36.6%)

表14 時間内に改善策が決定した生徒のホームプロジェクトに対する意欲(HP実施前)

	とても意欲的	意欲的	どちらでもない	意欲を持っていない	全く意欲持てない
改善策決定者(119人)	42人(36.1%)	56人(47.1%)	15人(12.6%)	0人(0%)	5人(4.2%)
改善策未定者(188人)	16人(8.5%)	102人(54.3%)	60人(31.9%)	6人(3.2%)	4人(2.1%)

#### (2) 展開②ホームプロジェクト発表会の結果

##### 1) 生徒のホームプロジェクト分析

夏休み、ホームプロジェクトを実施したテーマの分野は、住生活から食生活に変更した生徒も一部見られたが、両群ともテーマ設定時と同様、①住生活、②食生活、③家庭経営の順であった。最も多かった具体的な実践内容は、①住生活は自室の整理、②食生活は栄養素を考えた食事作り、③家庭経営は生活時間の分析と改善であった。いずれも写真や表を伴う、事前事後の比較をしたレポートが多く、生活改善の状況がひと目で分かる工夫がされていた。

表15 実施したテーマの分野(夏休み)

	家庭経営	食生活	住生活	保育	その他
グループ学習導入群(140人)	23人(16.4%)	42人(30.0%)	7人(5.0%)	60人(42.9%)	0人(0%)
グループ学習非導入群(142人)	21人(14.8%)	41人(28.9%)	14人(9.9%)	59人(41.5%)	1人(0.7%)



図5 ホームプロジェクト発表会風景

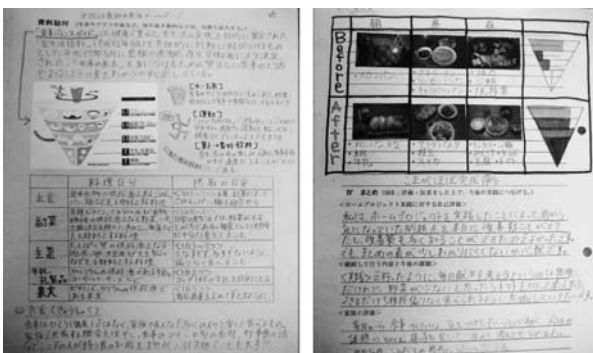


図6 生徒のホームプロジェクトレポート（食）



図7 生徒のホームプロジェクトレポート（住）

評価は、夏休みに各自書いてきたホームプロジェクトレポートで行った。ホームプロジェクトに対する教師評価の平均は、ホームプロジェクトの進め方、実践内容ともに、グループ学習導入群の方が高かった。特に、グループ学習導入群の実践内

容は、充実したものが多く、グループ学習によって、ホームプロジェクトのイメージが湧きやすく、家庭実践しやすかったのではないかと考察できる。

なお、ホームプロジェクトの進め方とは、(See → Plan → Do → See) ができているかを評価したものである。ホームプロジェクトの進め方に対する評価が両群とも半分程度と低いのは、See (反省・評価) の、自己分析が深くできている生徒が少なかったためである。

表16 ホームプロジェクトに対する教師評価の平均(3点満点)

	ホームプロジェクトの進め方	実践内容
グループ学習導入群 (159人)	1.52	2.19
グループ学習非導入群 (157人)	1.37	1.81

## 2) 質問紙調査2の結果

ホームプロジェクトを意欲的に実施できたか尋ねたところ、ホームプロジェクト実施前調査では、両群ともに7割を超えていたが(表12)、実施後調査では、5～6割まで下がった。さらに、グループ学習導入群の意欲は、非導入群より低かった。これは、グループ学習導入群の生徒が、グループ学習非導入群より高い実践イメージをもってホームプロジェクトに臨んだため、それに到達できなかった生徒が、「意欲的でなかった」と厳しく自己評価をくだしたためではないかと考察できる。

今後の生活改善チャレンジ意欲は、グループ学習導入群の方が、非導入群に比べて高かったことから、グループ学習導入群の生徒の目標レベルの高さがうかがえる。

表17 ホームプロジェクトに対する意欲(HP実施時)

	とても意欲的	意欲的	どちらでもない	意欲を捨てない	全く意欲がない
グループ学習導入群 (138人)	13人 (9.4%)	58人 (42.0%)	54人 (39.1%)	13人 (9.4%)	0人 (0%)
グループ学習非導入群 (140人)	13人 (9.3%)	69人 (49.3%)	43人 (30.7%)	14人 (10.0%)	0人 (0%)

表18 今後の生活改善チャレンジ意欲

	特にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
グループ学習導入群 (137人)	7人 (5.1%)	33人 (24.1%)	63人 (46.0%)	34人 (24.8%)	0人 (0%)
グループ学習非導入群 (132人)	1人 (0.8%)	7人 (5.3%)	28人 (21.2%)	60人 (45.5%)	36人 (27.3%)

## 3) ホームプロジェクト発表会の効果

ホームプロジェクトレポートのできばえに対する自己評価は、発表会前より後の方が高い傾向にあることが分かった。これは、班員の評価に影響を受け、See (反省・評価) 不足であった各自が、発表会を通して深く自己分析した結果、より高く自己評価できるようになったとも言える。

以下のホームプロジェクトに対する感想からも、発表会後に客観的な自己分析ができるようになり、次の実践につながる内容記述が多く見られるようになったことが分かる。



表 19 HP の進め方に対する自己評価の平均

	発表会前	発表会後
グループ学習導入群 (122人)	1.98 (92人)	2.16 (92人)
グループ学習非導入群 (97人)	1.90 (97人)	1.95 (128人)

表 20 HP の内容に関する自己評価の平均

	発表会前	発表会後
グループ学習導入群 (124人)	1.84 (92人)	1.87 (92人)
グループ学習非導入群 (98人)	1.93 (98人)	1.95 (128人)

## 【感想例】

発表会前「やろうとしてできなかった片づけを綺麗にできたので良かった。今の状態を継続したい」  
発表会後「調べ学習して環境面に着目したのがよかった。写真で事前事後の比較をするとよかった」

発表会前「家族に役立つことをしたので、喜ばれて嬉しかった。冬休みになったら、また実践したい」  
発表会後「料理を1食分しか作ってなかったので、何度か作ったらもっとよいHPになったと思う」

## (3) 展開③ホームプロジェクト継続の結果（質問紙調査3の結果）

授業を離れてもホームプロジェクト実践を各自に継続させる目的で、冬休みに自主的なホームプロジェクトを実践させた。冬休みに実践したホームプロジェクトのテーマの分野は、①住生活、②食生活、③家庭経営の順で、夏休みと同様であった。①住生活は年末の大掃除を含む家の掃除、②食生活は2学期に調理実習を行ったため、その内容を応用して家庭で実践したものが多かった。いずれも家族との関わりを強く感じさせる内容で、個人のみの活動に終わらず、ホームプロジェクトが回数を重ねることで、家族へ広がりを見せていることが分かった。

表 21 実施したテーマの分野（冬休み）

	家庭経営	食生活	衣生活	住生活	保育	その他
グループ学習導入群 (155人)	8人 (5.2%)	59人 (38.1%)	5人 (3.2%)	81人 (52.3%)	0人 (0%)	2人 (1.3%)
グループ学習非導入群 (116人)	6人 (5.2%)	40人 (34.5%)	3人 (2.6%)	66人 (56.9%)	1人 (0.9%)	0人 (0%)

今後の生活改善チャレンジ意欲は、夏休み実施時より高まり約8割になった。ホームプロジェクトを通し、家族に役立てたことによる充実感や達成感を実感できたことが、今後の意欲につながったのではないかと考えられる。

今回、テーマ設定段階において家庭の問題点ではなく自分自身の問題点について考えさせた。ホームプロジェクトを実践していく中で、前述の通り個人から家族を巻き込んだホームプロジェクトへ発展していった例も数多く見られたことから、本来のホームプロジェクトの目的は達成されており、最初は家庭よりも個人の問題点から入った方がテーマ設定がしやすく意欲が高まる考える。

また、レポートを課さず、手軽にホームプロジェクトを実施できたことも、今後の生活改善チャレ

ンジ意欲が高まった要因と考えられる。本来、ホームプロジェクトとは、レポートを書くことが目的ではない。夏休みの実践で、一度正しいホームプロジェクトの進め方を体得した後は、実践を中心に据えたホームプロジェクトを生徒に行わせ、繰り返し家庭で実践する感覚を身につけさせることが重要であるとする。

表 22 今後の生活改善チャレンジ意欲

	特にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
グループ学習導入群 (155人)	45人 (29.0%)	73人 (47.1%)	34人 (21.9%)	3人 (1.9%)	0人 (0%)
グループ学習非導入群 (115人)	46人 (40.0%)	44人 (38.3%)	22人 (19.1%)	2人 (1.7%)	1人 (0.9%)

## (4) 男女の傾向

生徒の実態調査で家庭での家事時間に男女差があることが明らかになっている。そこで、ホームプロジェクトの実践状況はどうであるか男女の比較をしてみた。

ホームプロジェクト実施前の興味を比較すると、男女共に、①住生活、②食生活、③家庭経営の順であった。しかし、その割合には差があり、男子は特に住生活が、女子は男子より食生活や衣生活の内容に関心が高いことが分かった。その傾向は、ホームプロジェクト実施の際、さらに顕著になった。

表 23 ホームプロジェクト実施前に興味をもったテーマの分野（質問紙調査1）

	家庭経営	食生活	衣生活	住生活	保育	その他	重複
男子 (131人)	16人 (12.2%)	22人 (16.8%)	1人 (0.8%)	68人 (51.9%)	2人 (1.5%)	19人 (14.5%)	3人 (2.3%)
女子 (123人)	18人 (14.6%)	30人 (24.4%)	15人 (12.2%)	48人 (39.0%)	2人 (1.6%)	9人 (7.3%)	1人 (0.8%)

表 24 夏休みに実施したテーマの分野（質問紙調査2）

	家庭経営	食生活	衣生活	住生活	保育	その他
男子 (143人)	24人 (16.8%)	29人 (20.3%)	3人 (2.1%)	78人 (54.5%)	0人 (0%)	9人 (6.3%)
女子 (139人)	20人 (14.4%)	54人 (38.8%)	19人 (13.7%)	41人 (29.5%)	0人 (0%)	5人 (3.6%)

ホームプロジェクトの実施前意欲は、男子に比べ女子が高かった。その結果、やはり実際のホームプロジェクトレポートの教師評価も、男子に比べ女子が高かった。また、男女共に、ホームプロジェクト実施前に比べ、実施時は意欲が下がった。

以上の結果より、男子のホームプロジェクトに対する意欲向上と、男女ともにホームプロジェクト実施前の意欲を持続させることが、今後の課題として挙げられる。

## (5) 本研究の成果

本研究の成果を測るため、従来型指導法と本研究で行った指導法によるホームプロジェクト実施時の生徒の意欲・役立ち感・満足度の比較を行ったところ、本研究の指導法が全ての項目で効果があることが明らかになった。

表 27 従来型指導法と本研究指導法におけるホームプロジェクト実施時の意欲

	意欲的	どちらでもない	意欲的でない	備考
従来型指導法 (285人)	140人 (49.1%)	118人 (41.4%)	27人 (9.5%)	表1
本研究指導法 (278人)	153人 (55.0%)	97人 (34.9%)	27人 (9.7%)	夏休みの実施時

表 28 従来型指導法と本研究指導法におけるホームプロジェクトに対する役立ち感

	役立った	役立たなかった	備考
従来型指導法 (285人)	191人 (66.8%)	95人 (33.2%)	表3
本研究指導法 (278人)	262人 (93.9%)	17人 (6.1%)	夏休みの実施時
本研究指導法 (269人)	257人 (95.5%)	12人 (4.5%)	冬休みの実施時

表 29 従来型指導法と本研究指導法におけるホームプロジェクトに対する満足度

	満足	満足でない	備考
従来型指導法 (285人)	66人 (22.6%)	208人 (69.5%)	表4
本研究指導法 (278人)	160人 (57.3%)	113人 (40.5%)	夏休みの実施時
本研究指導法 (269人)	157人 (58.4%)	112人 (41.6%)	冬休みの実施時

#### 4. 新しいホームプロジェクト指導法の提案

今回の検証授業より、本研究指導法である、①テーマ設定時におけるグループ学習の導入、②ホームプロジェクト発表会における工夫、③ホームプロジェクトを継続させる取り組み、の3点が、ホームプロジェクト指導の際、効果的であることが分かった。そこで、さらなる改善点を加え、高等学校「家庭基礎」におけるホームプロジェクトの指導法を提案する。

##### ①テーマ設定授業

グループ学習において、有効な時間の使い方ができるよう、今回の検証授業で用いたKJ法ではなく、班ごとの意見交換のみにとどめる。また、今回はホームプロジェクトの説明の際、市販の事例を用いたが、今後は、生徒のホームプロジェクト作品を提示し、それを基に各自家庭でどんな実践をするか意見交換をさせ、ホームプロジェクトの事前シミュレーションを行う。この作業を加えることで、より実践のイメージが湧きやすく、意欲を持続できるのではないかと考える。

##### ②ホームプロジェクト発表会

男子より女子の実践が比較的充実している傾向があるため、男女混合班で発表会を行う。これにより、班に意欲の高い生徒が振り分けられる可能性が増え、その発表を聞くことで、意欲の低かった生徒の次の実践に対する意識向上につながるのではないかと期待する。

また、今回は班ごとの発表のみであった発表会を、クラス発表会につなげ、2時間続きとする。班ごとの発表会で推薦された生徒が発表者となり、次時にクラス全員の前で発表する形態をとると、選ばれた生徒の達成感や満足感が高まり、他の生徒にとっても、様々なテーマの優れた発表を聞くことで、さらに次の実践へのモチベーションアップにつながると考える。

##### ③ホームプロジェクト継続

夏休みの実践と発表会により体得したホームプロジェクトの知識を基に、冬休みの実践はテーマ設定時から各自行う。今回同様、宿題のレポートは課さないが、冬休み前に、事後報告の様式を提示することで、生徒のホームプロジェクト実践意

欲を高めることにつながると考える。この段階を踏むことで、徐々にホームプロジェクトを家庭へ浸透させ、最終的には、こちらの投げかけがなくても家庭実践が可能になるのではないかと考える。

#### 5. まとめと今後の課題

ホームプロジェクトが戦後家庭科教育に導入され約60年が経つが、問題解決学力に注目が集まる近年、ようやく日の目を見るようになってきた感がある。一方、ホームプロジェクトの指導の困難さや生徒の家庭問題に対する関心の低さ、「家庭基礎」の単位数不足などから、ホームプロジェクトを実施していない学校も多くある。

そこで本研究は、ホームプロジェクトの指導が短時間で効果的に行え、さらに生徒の生活改善に対する意欲を高められる指導法を提案した。この指導法を実践することにより、ホームプロジェクトの指導に手応えを感じられれば、高校現場でもホームプロジェクトの実施率が高まるのではないかと考える。

本研究で、ホームプロジェクトは、繰り返し学習することで生活改善のチャレンジ意欲が高まるということが分かった。ホームプロジェクトを実践することは、家庭科を日々の生活に活かす思考を形成することにつながる。家庭科で習得した知識や技術を実際に家庭で試し、生活の充実向上に結びつけるために欠かせないホームプロジェクトは、家庭科の意義を示す真髄とも言える。今一度原点に立ち戻って、指導者はホームプロジェクトの重要性を再認識し、真剣に取り組む必要があると考える。今回の検証は進学率の高い受験校で行った。今後は、職業高校等でも検証を行い、より生徒の実態に合った指導法を検討していきたい。

#### 6. 参考文献

- 1) 家庭科教育事典, 日本家庭科教育学会, 実教出版, 1992年
- 2) 「授業研究大事典」, 明治図書出版株式会社, 1975年
- 3) 安藤美紀子, 高等学校家庭科ホームプロジェクトに対する課題ー家庭科主任の意識を通してー, 日本家庭科教育学会誌47(4), 2005年
- 4) 愛知県高等学校家庭科研究部会, ホームプロジェクトに関するアンケート結果, 2006年, <http://www.tcp-ip.or.jp/~kateiken/homeproanke-to.pdf>
- 5) 鈴木真由子・笠原純子, 新潟県におけるホームプロジェクトと学校家庭クラブ, 新潟大学教

育人間科学部紀要，人文・社会科学編，5（1），  
2002年

- 6）二宮喜美恵，高等学校家庭科におけるホーム  
プロジェクトについて（第1報），日本家庭科  
教育学会誌26-2，1983年
- 7）中屋紀子・佐藤淑子，高等学校家庭科ホーム  
プロジェクトの指導方法，宮城教育大学紀要，  
32，1997年